

# 知章

世阿弥作

季は	地は	シテ	ワキ	後	シテ	ワキ	前
春二月	播磨	平知章	前に同じ。		里人	旅僧	

「春を心のしるべにて。く。憂からぬ旅に出でうよ。」

「是は西国方より出でたる僧にて候。我いまだ都を見ず候ふ程に。唯今おもひたち都一見ところろざし候。」

「旅衣。八重の潮路をはるぐと。く。なほ末ありと行く波の。雲をも分くる沖つ船。われも浮世の道いで。いづくともなき海ぎはや。浦なる関に着きにけり。く。」

「さてもわれ鄙の国よりはるぐと。是なる磯辺に来て見れば。あたらしき卒都婆を立ておきたり。なき人の追善とおぼしくて。要文さまぐ書きしるし。物故平の知章と書かれたり。知章とは平家の御一門の御なかにては。誰にてかましますらん。あら痛はしや候。」

「なふく御僧は何事を仰せ候ふぞ。」

ワキ詞 「是は遠国より上りたる僧にて候ふが。是なる卒都婆を見れば。物故平の知章と書かれて候。御一門の御中にて候ふやらんと痛はしく存じ。一遍の念仏を廻向申して候。

シテ 「げにくく遠国の人にてましませば。知ろしめさぬは御ことわり。知章とは相国の三男新中納言知盛の御子にて候。二月七日の合戦に。この一の谷にて討たれさせ給ひて候。されば其日も今日にあた

りたれば。ゆかりの人の立てたる卒都婆にて候。時もこそあれ御僧の。今日しもこゝに來り給ひ。廻向し給ふありがたさよ。一樹の陰一河の流。是れ又他生の縁なるべし。よくく弔ひ給ひ候へ。ワキ 「げにくく仰せのごとく。他生の縁のあればこそ。かりそめながらこゝに來て。

シテ 「無縁の利益をなす事よと。

ワキ 「思ひの玉の数くりて。

シテ「とぶらふ事よさなきだに。

シテ、ワキ「一見卒都婆永離三悪道。何況造立者。必生安樂國。  
物故平の知章成等正覚。

下歌地「きのふは人の上。けふは我をも知らぬ身の。しか  
も弓馬の家人ならば。法にひかれつゝ。仏果に至  
り給へや。

上歌「唯一念の功力だに。く。三悪の罪は消えぬべし。  
まして妙にも説く法の。道のほとりの亡き跡を。

逆縁もなどかなかるべき。く。

ワキ詞「さて知盛の御最期は何とかならせ給ひて候ふぞ。

シテ詞「さん候知盛は。あれに見えたる釣舟のほどなり  
し。遥の沖の御座船に。追ひつき助かり給ひて候。

ワキ「さてあれまでは小船にめされて候ふか。

シテ「いや馬上にて候ひし。其頃井上黒とて屈竟の名馬  
たりしが。二十余町の海の面を。やすくとおよ  
ぎわたり。主を助けし馬なり。されども船中に所

なかりし間。のする人もなくして。又もとの汀に  
およぎあがり。此馬ぬしの別れを慕ふかと思しく  
て。沖の方に向ひ高嘶きし。足搔きしてぞ立つた  
りける。畜類も心ありけるよと。見る人あはれ  
を催しけり。

地「越鳥南枝に巢をかけ。胡馬北風に嘶えしも。旧郷  
を忍ぶ故なりとか。胡馬は北風をしたひ。此馬は  
西にゆく船の。纜につながれても。ゆかばやと思

ふ心なり。

ロンギ地「さるほどに。日もはや暮れて須磨の浦。海人の磯  
屋にやどりして。逆縁ながらとぶらはん。

シテ「げに有難や我とても。よそ人ならず一門の。内外  
にかよふ夕月の。後の世の暗を訪ひたまへ。

地「そも一門の内ぞとは。御身いかなる人やらん。

シテ「今は何をか包井の。水がくれて住むあはれ世に。

地「亡き跡の名は。

シテ「白真弓の。」

地「帰るかたを見れば。須磨の里にも野山にも。行か  
で汀のかたをなみ。蘆辺をさしてゆく田鶴の。浮  
きぬ沈むと見えしまゝに。うしろかげも失せにけ  
りや。うしろかげも失せにけり。（中入）

ワキ歌

「夕波千鳥友寐して。く。処も須磨の浦づたひ。  
野山の風もさえかへり。心も墨の衣手に。此御経  
を読誦する。く。」

後シテ一声

「あら有難の御弔ひやな。われ修羅道のくるしみの。  
ひまなき内にかくばかり。魄霊にひかれて来りた  
り。浮ぶべき。波こゝもとや須磨の浦。」

地「海すこしある通路の。」

シテ「うしろの山風上野のあらし。」

地「草木国土有情非情も。悉皆成仏の。彼岸の海ぎは  
に。浮び出でたる有難さよ。」

ワキ

「ふしぎやなさもなまめきたる若武者の。波にうか

びて見え給ふは。いかなる人にてましますぞ。

シテ詞

「誰とはなどやおろかなり。御弔ひのありがたさに。

知章これまで参りたり。

ワキ

「さては平家の公達を。まのあたりに見たてまつる

事よと。昔にかへる浦波の。

シテ

「浮織物の直垂に。妻にほひの鎧着て。

ワキ

「さも花やかなる御姿。

シテ

「所もさぞな。

ワキ

「須磨の浦に。

地

「おぼろなる。仮の姿や月のかげ。く。うつす絵

島の島がくれ。行く船を。惜しとぞ思ふ我父に。

わかれし船影の。あと白波もなつかしや。よしと

ても終にわが。憂き身を捨て、西海の。藻屑とな

りし浦の波。かさねて訪ひてたび給へ。く。

ワキ詞

「さらば其時の有様くはしく御物語り候へ。

地クリ

「さても其時の有様かたるにつけて憂き名のみ。龍

田の山の紅葉ばの。くれなる靡く旗のあし。ちりぐくなるけしきかな。

シテサシ「主上二位殿をはじめ奉り。其外おほいどの父子。

地「一門皆々船に取り乗り。海上に浮ぶよそほひ。唯滄波のうねに浮き沈む水鳥の如し。

シテ「其中にも親にて候ふ新中納言。われ知章監物太郎。主従三騎に討ちなされ。

地「御座船をうかゞひ此汀に打ちいでたりしに。敵手

しげくかゝりし間。又ひつかへし打ちあふ程に。

知章監物太郎。主従こゝにて討死する。

シテ「そのひまに知盛は。

地「二十余町の沖に見えたる。大臣殿の御船まで。馬を泳がせ追ひついて。御船に乗りうつり。かひなき御命たすかり給ふ。

クセ「知盛其時に。おほいどの、御前にて。涙を流しのたまはく。武蔵の守も討たれぬ。監物太郎頼賢も。



あの汀にて討たるゝを。見すてゝ是までまるる事。  
面目もなき次第なり。いかなれば子は親のため。  
命を惜しまぬ心ぞや。いかなる親なれば。子の討  
たるゝを見すてけん。命は惜しきものなりとて。  
さめぐくと泣き給へば。よその袖もぬれにけり。  
おほいどのものたまはく。武蔵の守はもとよりも。  
心も剛にして。よき大将と見しぞとて。御子清宗  
の。方を見やりて御涙を。ながし給へば船のうち  
に。つらなれる人々も。鎧の袖をぬらしけり。

シテ「武蔵の守知章は。

地「生年二八の春なれば。清宗も同年にて。ともに若  
葉の磯馴松。千代を重ねて栄ゆくや。累葉枝を連  
ねつゝ。一門々をならべしも。今年の今日はいかな  
れば。所も須磨の山桜。若木はちりぬ埋木の。浮  
きてたゞよふ船人と。なりゆく果ぞかなしき。

ロンギ地「げに痛はしき物語。おなじくは御最期を。懺悔に

語り給へや。

<sup>シテ</sup>「げにや最期のありさまを。慙愧懺悔にあらはし。修羅道の苦患まぬかれん。」

<sup>地</sup>「げに修羅道のくるしみの。その一念も最期より。」

<sup>シテ</sup>「聞きつるまゝの敵にて。」

<sup>地</sup>「すはや寄せくる。」

<sup>シテ</sup>「浦の波。」

<sup>地</sup>「団扇の旗は兎玉党か。ものくしといふまゝに。」

監物太郎が放つ矢に。敵の旗さしの。首の骨のぶかに射させて。まつ逆さまにどうと落つれば。

<sup>シテ</sup>「主人とおぼしき武者。」

<sup>地</sup>「主人とおぼしき武者。新中納言を目にかけて。かけよせて討つ処を。親を討たせじと。知章かけ塞がつて。むずと組んでどうと落ち。取つて押さへて首かき切つて。起きあがる処を又。敵の郎等落ち合ひて。知章が首を取れば。終にこゝにて討た

れつゝ。其まゝ修羅の業にしづむを。思はざるに御  
僧の。弔ひは有難や。是ぞ誠の法の友よ。これぞ  
まことの知章が。跡とひてたび給へ。亡きあとを  
訪ひてたび給へ。